

# 幕末の越知山信仰の一般化と「越知山開運講」

三井紀生

## まえがき

## 一 越知山開運講とその発祥

「越知山大権現の神仏と石造物」を調査研究課題としてとりあげ、越知神社と越知山大谷寺に遺されている神仏、堂社の備品および墓碑・石碑などの調査を行ってきた。この中に幕末の安政年間から明治初年にかけて越知山開運講中や講の肝煎など関係者によって奉納されたものが多数見られ、大谷寺には開運講が結ばれた当時の史料（以下「大谷寺文書」）が遺されていることも知った。そして平成二十九年（二〇一七）三月、遺存する石造物などモノ側から見た越知山開運講の概要を「越知山開運講について」と題して『越前町織田文化歴史館研究紀要第2集』と拙著『越知山大権現の神仏と石造物』（越前町教育委員会発行）の中で紹介したが、本稿は「大谷寺文書」に見る開運講の目的、趣法、加入講員名簿などを記した史料を加えて講の全容を整理したものである。

幕末の嘉永年間以降、諸外国の開国要求が活発化し、幕府は蘭、米、露、英、仏と修好通商条約を結び、長崎、神奈川、箱館を開港して自由貿易を許可したが、天皇の勅許を受けなかったため朝廷と対立、また、將軍継嗣問題をめぐる諸大名の対立に起因して多くの公家や大名・家臣が弾圧を受け、次々逮捕され（安政の大獄）、梅田雲浜は獄死、橋本左内、吉田松陰らも死罪となり、桜田門外の変などが起きるなど激動の時代であった。このような情勢の中、越前では藩主の幕政支援参画や藩政改革が進められていた。

嘉永三年（一八五〇）十二月、越知山大権現の別当大谷寺の大講堂、護摩堂、本坊（大長院）が火災により焼失した。翌嘉永四年（一八五二）の「越知山諸堂再建勸進帳」（『朝日町誌 資料編2』越知神社関係文書一二二号）によると、文政十年（一八二七）に秘仏の三所権現（十一

面観音・聖観音・阿弥陀如来)を開帳して二十五年が過ぎ、次の安政六年(一八五九)に三十三年開帳を迎えるに当り、講堂や護摩堂の再建が急務と記している。そして、諸堂再建の資金を福井藩家中、組、町方、在方および他所に広く勧進、延四十一貫六百八十九匁四分三厘(筆者の計算では四十三貫四百三十八匁)が奉加され、この中に駒屋善右衛門の世話により集められた分が「四貫九百四十匁匁壹分三厘 福井駒屋氏ヨリ世話ニ而上り候高」と記述している。

さらにこれとは別に、駒屋の取持による末盛講(御札所において結縁された三組の講)の徳分三十七貫五百匁が寄附されている。

越知山大権現を篤く崇拜していた駒屋善右衛門は、別当大谷寺にとつて特別な存在であった。筆者は、越知山開運講は、諸堂再建のために駒屋の発願に従って浄財寄進に加わった人々を母体に発祥したのではないだろうかと考えるのである。

嘉永五年(一八五二)、七間四面の講堂、翌六年に本坊大長院が完成、そして護摩堂が再建された安政四年(二八五七)六月、既に嘉永四年の諸堂再建勧進発起世話役七人の中に加わっていた竹内五兵衛、鷲田次郎兵衛、駒屋善右衛門の三人が肝煎になって「越知山開運講」が結ばれることになった。

その二年後の安政六年(一八五九)三月から秘仏三所権現の三十三年開帳は無事営まれ、この頃には越知山開運講はかなり大きな団体になっていたようだ。

## 二 肝煎と世話人

最初に、越知山開運講を結び、講の肝煎を務めた竹内五兵衛、鷲田次郎兵衛、駒屋善右衛門、および講の世話人について触れておきたい。

### (一) 三人の肝煎

#### ○竹内五兵衛(号布珀)

竹内家は、屋号を漆屋と称し、文政十年(一八二七)藩御用達商人とし出精して苗字御免となり、竹内を称し、歴代五兵衛を名乗っている(「福井城下扶持人姓名書上」『福井市史資料編7』)。

開運講の肝煎役を務めた五兵衛は、万延元年(一八六〇)、藩主導で設立した産物会所の四人の元締役の一人として福井・三国・府中などの商人、町奉行長谷部甚平・郡奉行三岡八郎(のち由利公正)などと共に活動した。

#### ○鷲田次郎兵衛寛隆(号省齋)

鷲田家は、薬種業を営み、開運講の肝煎を務めた次郎兵衛寛隆は、京都の国学者福田美楯に学び、国学者・歌人としても知られ、三国の内田平三郎(号東垣)などと文芸面で広い交流があったようである。明治二十二年(一八八九)発行の『福井県下商工便覧』に薬舗の店構えを掲載している。

#### ○駒屋善右衛門清慎(号羽江)

駒屋家は、慶長年間に福井九十九橋の北袂に屋敷を構え、両替商

を営み、藩札元を務め、創業の時期は不明であるが薬種商も営んできた。<sup>②</sup>

幕末善右衛清慎の代、万延二年（一八六一）一月に荒木祐右衛門宅に産物会所（内田惣右衛門宅〈三国〉から移動）を、駒屋へ御札所一集を仰せつけられ、藩の経済活動に参画していた（万延二年二月十九日、文久に改元）。

彼は、越知山大権現を崇敬し、開運講を発願し、惣肝煎を務めた。明治二十二年発行の『福井県下商工便覧』に往時の姿を思わせる店構え（薬舗）を掲載している。

## （二）二十四人の世話人

現大谷寺の本堂入口向かって左上に半鐘が下がっている（写真1）。「越知山大権現」「奉納開運講中」の鑄出し文字が見え、安政六年（一八五九）の秘仏三所権現の三十三年開帳直前の二月に寄進された。

この半鐘の周りに次の二十八名の名前が刻まれている。肝煎役として駒屋善右衛門清慎を筆頭に竹内五兵衛、鷺田次郎兵衛、駒屋義三郎（善右衛門の補助）の四名が並び、次に世話



写真1 肝煎・世話人の銘を刻む半鐘

役と刻んだ後に二十四名、辻彦兵衛、梅屋善藏、舛屋与三松、駒屋勘助、牧本安五郎、鍛冶屋金次良、大久保屋与四郎、紺屋吉助、酢屋太兵衛、栗原屋次兵衛、木村新太郎、木乃屋彦右衛門、花屋長三郎、金津屋弥助、番上屋善藏、角屋忠右衛門佐、藤屋伊右衛門、羽生惣兵衛、村中忠吉、結城磯右衛門、鍛冶屋小三郎、田中吉右衛門佐、鑄物師長吉、糸屋九兵衛を記している。

開運講は惣肝煎（兼松組肝煎）駒屋、竹組肝煎竹内、梅組肝煎鷺田の三組の下に世話人を置いた組織で運営された。

世話人のほとんどは福井城下に住む商人で、講の一員であると同時に各組に属して講員の募集や加入者の参詣時の世話などを行っていたと思われる。

## 三 越知山開運講と趣法

安政四年（一八五七）六月、講を結縁するに当り、「越知山開運講」と題し竹内、鷺田、駒屋の三人の肝煎連名で、講加入を勧める文書を認めている。

### 越知山開運講（大谷寺文書）

一越知山大権現は大日本乃祖神―伊弉册尊 御本地は西方之教主阿弥陀如来 観世音菩薩也。表に八国家鎮護五穀成就を守護らせ給ひ裏には一切衆生を報土へ導給はんとの御請願なれば 観世音菩薩の化身たる泰澄大師深く御心をとめさせ給ひ王法佛法守護のために當山に安置しましたし越知山乃見おろし

四十四方は天災地変是なき□□<sup>(△)</sup>にと守らせ給ふ御神なり。  
當国に住む人誰かその御恩徳を蒙らざらん。

然るに世下元のすへにいたり其御恩沢をも知らざる人多かりたるゆへにや近年風雪地震水火の難少なからず恐るべき御事なり。

佛法之法を重んじ奉らん人はせめて一年に一度は歩を運び御神徳を仰き奉り御恩徳を報謝すへき事ならずや仍之神なる御講を結び越知山開運講と名つけて未々退転なく相勤弥増に御神徳を仰き奉り国家安全子孫長久開運出世を祈り奉らんと同士之人々に進め奉る事しかり

御講 竹内五兵衛

安政四丁巳年六月吉日 鷲田次良兵衛

肝煎 駒屋善右衛門(印)

要約すると、「越知山大権現は大日本の祖神、王法仏法守護のため安置され、当国に住む人誰に対してもその恩徳があるが、その御恩沢を知らない人が多いためであろうか、近年は風雪地震水火の難が多い。恐るは自身の事、仏法の法を重んずる人は、せめて年に一度は(越知山へ)歩を運び神徳を仰ぎ恩徳を報謝すべきではないか。ここに越知山開運講と名付けて講を結び、越知山大権現のご神徳を仰ぎ、国家安全子孫長久開運出世を祈願する同士の人々に進め奉る」と。そして「越知山開運講趣法」(大谷寺文書)として次の三点を定めている。趣法は世話方のマニュアルで参詣講員の対応法なども記述している。

(1) 講銭は、「日一錢講」つまり日に一錢(一文)を掛銭として積み立て、翌月朔日に三十文を世話役に差出す事

(2) 毎年六月朔日、講中の為に福井表にて祈祷し、講員に御守、供物を届ける事

(3) 毎年六月十八日は、講中一統御山(越知山)へ参詣し、御寶前にて講中安全の祈祷を行い、御札守とお神酒を頂く事

こうして、講が運営されてきたが、講員が増えて凡そ一千人にもなり、越前以外の遠国の加入者も増えてきたため、「日一錢講」の運営が困難になってきた。そこで、元治元年(一八六四)六月、「日一錢講」を講加入時に「永代掛金二百疋」(または「金二歩」)に改めて永代講員の加入を勧誘することになった。

越前國越知山永代開運講勧誘記(大谷寺文書)

越知山大権現乃利生靈験廣大なる事を遠国にてハ知らざる人多し。抑此越知山ハ越前國五山の第一北国佛法最初の靈山なり。持統天皇九年乙未歳 泰澄大師十一面觀世音菩薩の靈告によりて開闢したまへる所なり。泰澄大師と申ハ即觀世音菩薩の化身なり。白鳳十一年壬午歳夏六月當国麻生津に降誕したまひき。今の三十八社白鳳山泰澄寺ハその旧地なり。高德世にならびなく上天子を始奉り越の大徳と仰たまへりし智僧なり。初め越知山において密乗を感悟したまひ 御一生に畿内北陸に寺社を四万余ヶ所建立したまひて 神護景雲元丁未以来 大谷寺に入定しましたしけり。委ハ元亨釈書并當山の縁起に詳なり。

開闢より今に至りて一千一百餘年 香花退転することなく護

摩の煙山谷に薫り般若の声四方に唱る。現益を蒙る事挙てかそえかたし。

忝も御元祖中納言様深く御帰依在せられ神寶數種御寄附ましまし。御代々様御参詣今において年に數重なり。

信心の輩ハ天変地異を免れ風波の難を免れ、無實難を免れ一切の病苦を免れ功名を得富貴を得子孫を得長寿を保ち文道武道に上達ス。右の祈願悉く満足せすといふ事なし。中にも開運出世を守らせ給ふ御神事の故に去安政丁未歲(1847)同士の輩申合報恩の爲め開運講と号し毎日一錢掛の御講を結ひたるに御神慮に叶い日何らす一千人に及び種々の利益を得る者日ましに增多なり。

依而此度遠国の為日一錢分永代掛金貳百疋と相定候。信心の御方は御加入下され度候。一度金二歩御寄進に相成候得は永代御講中に相成以後懸り物少も無之候。毎春福井表二おいて御講中家内安全子孫長久之御祈祷御修い有之其節御講中江御札守御供物火防札等年々無相違肝煎中々嚴重に贈り届可申候。御加入思召之御方は當所肝煎中まで金貳歩御指出被成下さるへく候。御寶前姓名録二相記証書并永代講中切手御渡申し申候。御禪定之勤は此切手御持參被成候得は御前立之尊像御開扉有之室堂にて御宿止出来申候。

毎月十八日御縁日にて參詣帰敷殊二六月十八日ハ御祭禮にて山上市をなし諸人郡集(郡)は此日御講中之為別段御祈念にて候。金貳百疋にて永代の御縁を結び候事に候間信心の御方は被仰合子孫長久之御為御加入被成下さるへく候。以上

三井 幕末の越知山信仰の一般化と「越知山開運講」

元治元年

甲子六月

勅願所

越知山別當 大谷寺

越前福井

肝煎 竹内五兵衛

鷲田次良兵衛

駒屋善右衛門(花押)

開運講に加入すると「講錢受領証」と「講員証」が渡され、「永代加入姓名録」に記帳された。名簿は「錢一錢掛講」時のものは遺存せず、「永代掛講」になってからのもののみが現存する。

講錢受領証 具体例(写真2)で示すと、「元治二年(二八六五)、向

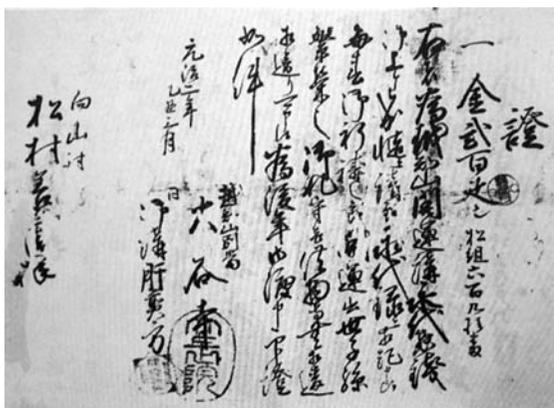


写真2 講錢受領書(『朝日町誌 通史編2』より)

山村の松村善兵衛 松組六百九十番が、越知山開運講の永代掛錢 金二百疋を納めたので、永代加入姓名録に記帳し、毎春祈祷の節、開運出世子孫繁栄の御札守と供物などを送り届ける」旨を記述した受領書を大谷寺と講の肝煎方連名記載捺印(駒屋印)の上渡ししている(『越知山開運講懸錢受取証』『朝日町誌 資料編2』)

越知神社関係文書一三三二号)。

永代加入者姓名録 講に加入すると御竈前に常備している「永代加入姓名録」に講員番号(組と番号)、住所、屋号(苗字)と名前が記



写真4 議員証(切手)の表裏 (大谷寺文書)

写真3 永代加入姓名録 全74頁(大谷寺文書)

述され、前例の松村善

兵衛の場合、写真3左

に示す如く姓名録に記

述している。なお、各

組の講員番号一番はそ

れぞれ駒屋、竹内、鷺

田であった(写真3右)。

議員証(切手) 開運

講に加入すると「切手」

と称する議員証(幅六

二、高さ十五三センチ)

が発行され、所属する

組と番号、町名、氏名

が記載された(写真4)。

裏面(写真4右)の

縦長の朱印には「此切

手御持参被成候へハ

何時ニても御開帳出来

申候 其外万事都合究

候」とあり、講員が何

時でも越知山参詣した場合、この切手を示せば、前立三所権現(秘  
仏三所権現は三十三年毎の開帳で、普段は前立三所権現が参拜でき  
た)が開帳され、室堂での宿泊もできた。

#### 四 開運講加入者

##### (一) 加入者数

前掲元治元(一八六四)年の「越前國越知山永代開運講勸誘記」に「去  
ル安政四(一八五七)丁未歳 同士の輩申合報  
恩の為め開運講と号し毎日一錢掛の御講を  
結びたるに 御神慮に叶い日何らす一千人に  
及び種々の利益を得る者日ましに增多なり」  
とあるが、前記のようにこの講員千人の名  
簿は現存しないが、「永代掛金二百疋」に改  
定以後の「永代加入姓名録」七十四頁(大  
谷寺文書)が遺存し、この姓名録に記載さ  
れている講員名に講員番号が付されている  
が、番号順記帳になっていない。これは、当  
初の「日一錢掛」講加入時の番号で、これら  
の講員が永代掛金を納めた順に名簿を再製  
した姓名録であろう。永代加入姓名録に記  
帳されている組ごとの最大番号と永代講員  
数を整理すると表1のようになる。

表1 開運講加入者数(組別)

組の名称	肝煎名	①最大番号	②永代講員数	②/①(%)
松組	駒屋善右衛門	701番	403人	57.5
竹組	竹内五兵衛	74	24	32.5
梅組	鷺田次郎兵衛	142	72	50.7
合計		917	499	54.4

講錢を永代掛金二百疋に改めたことにより、従来の講員の扱いがどうなったかは不詳であるが、永代講員として加入した数は半数に近い五十四・四パーセントに減少している。

また、永代加入者を地域別に見ると表2に示すように広範な地域に広がっており、福井城下が最も多く、次に大谷寺周辺の村（現越前町）、坂井市（主に三国町）の順になっている。

## （二）加入者

加入者は武家、商人、肝煎・庄屋など村の指導者、職人の他寺院など広く各層の人が加入している。

武家 鉄御門前の狛氏・北狛氏（高知席）、桜御門内の荻野氏（高知席）、や本多氏・笹治氏・酒井氏・狛氏など高知席家中の武士、本保陣屋の役人、福井江戸町住の禄高百石クラスの下級藩士三岡、小木氏などの名もある。両氏は、安政六年から万延元年にかけて太田陣屋勤めをした三岡助右衛門と小木佐平次であろう。

そのほかには幸若舞で知られる桃井氏（西田中村）や医師なども加入している。

商人 講に加入していた商人を個々に説明するには数が多いため、文久三年（一八六三）、福井藩主松平慶永、茂昭の上京費用として、町奉行長谷部甚平・郡奉行三岡八郎などの名で課達した御用金五万両（三国、福井、上領、中領、下領各一万両）のうち三国と福井の拠出者を例に見る。表3は、三国と福井の御用金拠出者と拠出額および越知山開運講の永代加入者（組と番号を記載）一覧である。

三国は海運業で大きな財を築いた商人を中心に三十四人で

表2 地域別永代講加入者数（人）

現行政区	史料に掲載の町村名	松組	竹組	梅組	合計
坂井市	三国町、丸岡町、東西太郎丸、石塚、姫王、兵庫	50		7	57
あわら市	金津町	14			14
永平寺町	松岡村	4			4
福井市	福井城下、上野、東下野、岡保宮地、江端、小稲津、中脇、末広、西新町、浄教寺、向山、笹谷、滝波、下天下、大森、清水畑、片粕、猿和田、風巻、梅浦、蒲生（278人中、福井城下の人数は240人）	216	17	45	278
勝山市	平泉寺、龍谷	2			2
大野市	大野町	4		1	5
越前町	西田中、佐々生、天王、乙坂、開発、横山、葛野、大谷寺、野田、大玉、杖立、天谷、上糸生、玉川、茂原、道口、下河原、入尾、細野、小曾原、檜津、寺、円満、大谷	60	2	1	63
鯖江市	鯖江町	1		1	2
越前市	府中、本保、余田、北小山、岩本、戸谷、四郎丸	30	1	4	35
南越前町	今庄町、阿久和、鯖波、金粕、赤萩	6			6
越前以外	江州、大坂、京都、加賀、江戸、薩州、美濃、備前、筑前	15	4	13	32
不詳		1			1
	合計	403	24	72	499

表3 文久3年(1863)福井藩御用金抛出者と開運講永代加入者(三国・福井商人)

No	三 国					福 井				
	姓・屋号	名前・人数	金額(両)	開運講員	摘 要	姓・屋号	名前・人数	金額(両)	開運講員	摘 要
1	内田	惣右衛門(7代)	2,100	梅 25	内田本家	山田	大五郎	350	松584	元元 町年寄
2	森(三国)	興兵衛(宮腰屋)	1,700	松288		内藤	理兵衛	250	竹 62	文3 会所元締
3	内田	平三郎(平右衛門)	1,200	梅 34	東内田家	山田	又左衛門	250	竹 21	安6 御用達役
4	中嶋	十郎兵衛	900	松554		山田	五郎兵衛	250		
5	津田	彦右衛門	800	松434		山口	小左衛門	200	竹 69	元元 会所元締
6	森田	三郎右衛門	450	松695		茵屋	利兵衛	200	松165	天12 札所元締
7	名村	忠右衛門	450	松380		竹内	五兵衛	100	竹 1	元元 会所元締
8	中濱屋	利助	400	松696		長浜屋	助三郎	100		
9	宮腰屋	五郎兵衛	250	松382		神谷	惣右衛門	100	松209	御用達役
10	内田	武右衛門(2代)	200	松451	西内田家	多田	善四郎(米屋)	100		
11	室屋	源太郎	75			和田屋	忠兵衛	100		
12	菅の屋	善右衛門	150	松403		山田	二右衛門	100	松 71	安6 御用達役
13	石屋	文右衛門	100	松454			ぬしや	100		
14	戸口屋	久三郎	150			鷲塚屋	市郎兵衛	100	松162	安6 御用達役
15	岡田屋	又四郎	75	松364		米屋	仁兵衛	100		
16	布め屋	太兵衛	75	松404		山崎屋	次助	100		
17	鳥屋	興兵衛	75	松 53		古手屋	又兵衛	100		
18	紙屋	惣八	50	松381		松代屋	伊八	100	梅 21	嘉4 御用達役
19	中濱屋	二兵衛	50			樽谷	八右衛門	100		
20	隨應寺屋	二兵衛	50			小川屋	弥助	100		
21	伊豆蔵	吉右衛門	50			漆尾	茂助	100		
22	紙屋	吉郎右衛門	50			上野屋	善兵衛	100	竹 33	
23	池上	吉右衛門	50	松406		綿屋	六郎右衛門	100		
24	大坂屋	市郎兵衛	50	松609		鏝屋	太左衛門	100		
25	宮腰屋	善助	50			楠屋	惣七	100		
26	譽田屋	久右衛門	50			嶋田	次郎三郎	80	松539	
27	魚屋	次郎八	50			須賀原	彦左衛門	75		
28	魚屋	次郎兵衛	50			山田	宗左衛門	75	松243	文3 会所元締
29	宮腰屋	惣右衛門	50	梅 77		米屋	易右衛門	75		
30	中屋	甚兵衛	50			上禮屋	嘉右衛門	70		
31	折敷屋	長兵衛	50			玉屋	五郎兵衛	70		
32	番上屋	七郎右衛門	50			道具屋	利右衛門	70		
33	酢屋	平兵衛	50			谷屋	猪助	70		
34	沢屋	治右衛門	50			大黒屋	平三郎(姓片山)	70	松279	嘉3 30人扶持
35	箕や	孫四郎	0			美濃屋	嘉助	70	松 6	
36	天満屋	八兵衛	0			紵屋	清助	70		
37	池上屋	平七	0			布施田屋	長太夫	70		
38	田中	退助	0			八百屋	甚三郎	70	松254	
39	平のや	吉兵衛	0			荒屋	長左衛門	70		
40	布めや	吉右衛門	0	松378		荏屋	利右衛門	70		
41	吉田	小兵衛	0			家具屋	次郎兵衛	70		
42	新保屋	林右衛門	0			煙草屋	次郎右衛門	70	松 3	
43	室屋	金六	0			木屋	助十郎	70		
44	山本屋	藤兵衛	0			片屋	助右衛門	70	竹 24	文2 会所元締
45	宮腰屋	清兵衛	0			楠屋	喜左衛門	70	竹140	
46	桶屋	次兵衛	0			小計	45人	4,825	内講員19人で2,425両	50両以上の抛出者
47	室屋	助四郎	0			小計	50両以上70両未満19人	1,025	内講員2人で110両	人数64人 金額5,850両
48	新保屋	惣助	0			小計	50両未満261人	4,295		
49	布目屋	三右衛門	0							摘要欄の元元:元治元年
50	紺屋	庄右衛門	0							文;文久、万;万治、安;安政・・
	合計	34人	10,000			合計	325人	10,145		
	開運講加入者	御用金抛出者34人中19人	9,125			開運講加入者	御用金抛出者64人中21人	2,535	70両以上 45人中19人 50両以上 19人中2人	

出典1 「内田家記録4」(『三国町史料 内田家記録』三国町史編纂委員会編 三国町教育委員会 昭和45年発行)

2 「御用金控帳」(『福井市史資料編7 近世5』編集発行 福井市 平成14年 以上から引用して作表。)

一万両、うち開運講加入者十九人で九千二百二十五両を抛出している。福井は抛出者の裾野が広く、三百二十五人で一万両を抛出、うち七十両以上は四十五人で四千八百二十五両（備考―五十両以上七十両未満は十九人で一千二十五両）を抛出、四十五人中講加入者は十九人で二千四百二十五両（同一五十両以上七十両未満は二人で百十両）を抛出している。

上位の抛出者には内田惣右衛門や森与兵衛など禄を受けていた商人や扶持を受けていた藩御用達商人などが多く、三国・福井共に幕末の越前の経済を牽引していた豪商が講に加入していたことがわかる。

越前以外では、湖東の近江商人、福井藩御用達商人を務めた大津の矢嶋藤五郎、藩の政策で薩州鹿児島藩と交易が進められた関係と思われる指宿の豪商濱崎太平次家の番頭中村八左衛門、高崎徳兵衛、京都鳩居堂の熊谷久右衛門などの名前も見える。

寺院 別当大谷寺は天台宗であったが、講に加入した寺院は宗派に偏りはなく、西光寺（三国浄土宗）、法真寺（福井三ツ橋真宗山元派）、恵光寺（福井東下野浄土真宗東本願寺派）、最勝寺（東郷中脇浄土真宗本願寺派）、天龍寺（松岡曹洞宗）の名が見られる。村の役付者 在村では表2に示す村の大庄屋、庄屋など行政を司る役付者が率先して加入している。

特に別当大谷寺近在の村の加入者を具体的に何名か挙げると、水島五兵衛・増田三右衛門（大谷寺）、渡辺与兵衛・与左衛門（上糸生）、内藤伊右衛門（大玉）、橘見良（葛野）、駒喜右衛門（天谷）、三田

村惣右衛門・高橋重左衛門（天王）、内田久右衛門（大森）、渡辺与四郎（笹谷）青木勝左衛門（蒲生）などの名が見える。

このように、永代加入者を個々に積み上げていくと、幕末の福井藩の経済活動の縮図を見ている感がある蒼々たるメンバーである。これひとえに三人の肝煎の人脈に帰するところが大きかったと言わざるを得ない。

## 五 越知山大権現の繁栄

越知山大権現は修験道を志す山伏の厳しい修行の場所であったが、前掲嘉永四年（一八五二）の「越知山諸堂再建勸進帳」にあるように、福井藩の重臣、武家のほか町内組・村単位に広く浄財を集めている。こうしたことから徐々に一般の参詣者も増え、開運講結縁はこれに一層の拍車をかけたといえるだろう。

福井の商人山口小左衛門（開運講員）は、「山口家譜」の安政六年（一八五九）の項で「三月十六日、四月十六日迄越知山大権現様御開帳有之、誠ニ希代参詣多ク有之候」と記している（『福井市史資料編7』）。また梅浦の岡田茂十郎は、「天文日記（抄）」や「諸事雜記（抄）」の中で三所権現の三十三年開帳後の六月十八日の祭日には「遠近から多くの参詣者が集まり、例年より百倍」と、万延元年（一八六〇）七月十八日の越知山の祭日に参詣した折には、山上の堂にて「大谷寺の方丈、駒屋、鷺田に会って開運講を談じた」と記している（『朝日町誌資料編2』越知神社関係文書一二四号）。

## 六 神仏判然令と越知山開運講

元治二年(一八六五)三月、越知山開運講が、越知山上へ奉納する手水鉢(笏谷石製)を造り、福井から天王村まで運んだ。明治三年(一八七〇)六月に天王村から天王坂、牛越峠を越えて、同年十二月に越知山本道登り口宿堂の一王子社まで到着した。ここから越知山頂まで運ぶには多額の講銀が入手となり、一時に上げることが困難になり、開運講中や志願者に特別寄進を募ったのである。この時同時に新たな開運講への加入者も募り、加入金は「金二歩」と記述している「越知山峯奉納手水鉢勸進状」(『朝日町誌 資料編2』越知神社関係文書一五五号)。

この史料に記すように、越知山開運講は明治三年(一八七〇)十二月にはまだ継続され、新たな講加入者の募集も行っていたが、講をとりまく政治・社会環境は既に著しい変化があった。

明治元年(一八六八)、明治新政府公布の神仏判然令によって越知山大権現社から仏教色を除いて越知神社が誕生することになり、明治四年(一八七二)初めに越知山大権現の別当大谷寺の住職は還俗して越知神社の宮司になった。ここに別当大谷寺の法灯は途絶えた。さらに明治五年(一八七二)、修験禁止令が公布され、修験道つまり修験宗廃止となり天台宗系の本山派(本山聖護院)は天台宗へ、真言宗系の当山派(本山醍醐寺派三宝院)は真言宗へ統合されるこ

とになった。

このような環境になって以降、現実が開運講の所期の目的と乖離し、活動の継続が困難になったと思われる。越知山開運講中や駒屋銘を記す石碑・石仏などの奉納物は、越知山や大谷寺および周辺に見られなくなった。

そして修験禁止令が公布された翌年の明治六年(一八七三)、肝煎を務めた鷲田次郎兵衛寛隆が死去、その六年後、越知山大谷寺が再興した明治十二年(一八七九)、駒屋善右衛門清慎も死去し安養寺(福井市)に葬られた。

## 七 越知山開運講中がのこしたモノ

越知山開運講中および惣肝煎を務めた駒屋善右衛門は、数々の奉納物を遺している。<sup>④</sup>この中から六件を記しておきたい。

### (一) 越知山大権現半鐘

前出二十四人の世話人の項で具体的に記述したので、本項では詳細を省略するが、この半鐘に刻まれている世話人二十四名の名前を記す史料は、この半鐘以外には未だ知らず、史料として貴重な存在である。

### (二) 千体地藏

越知神社境内に駒屋清慎の謹識による千体地藏造立碑が遺されている。碑文によると、「千躰地藏は(秘仏三所権現の三十三年開帳のあった)安政六年に造立開始、翌年万延元年九月成し(千躰達成)、さらに翌年文久元年六月十八日(越知山大権現祭日)に開眼供養し



写真6 「越」の印章と  
50丁目の地藏

元治元年（一八六四）九月、越知山開運講は越知大権現本社から六十丁の距離にある元別山で雨曝しになっていた聖観音像（石造）の堂宇再建と六十丁の路傍二丁ごとに地藏を安置した。観音堂が所在していた元別山は、坂東山（現六所山）といい、八股村、城有村、梨子平村の共有地で天領であった。近年、地藏は越知山泰澄塾の人々

写真5は、三国の内田平三郎（東内田家、号東垣）が奉納した地藏。  
（三）元別山堂再建と路傍の地藏



写真5 千鉢地藏の1体

た」とあり、造立開始から開眼供養まで三年の年月を要しており、碑の背面には駒屋の喜びと安堵の気持ちも刻んでいる。

なお、千体地藏は像高が二十センチ前後で、凡そ五百人の人が奉納している。



写真7 滝上不動堂（白滝神社）と  
開運講中寄進の石灯籠

によって三十五体の現存が確認された。写真は五十丁目の地藏、右肩横に「越」の文字を刻むが、同一の印章が大谷寺に遺存している  
（四）滝上不動堂（現白滝神社）の石灯籠  
一乗谷の滝（福井市浄教寺町）は、泰澄が越知山に在る時、東方に靈感を感じて下りてきたゆかりの地とされている。  
慶応元年（一八六五）、滝上に位置する不動堂周りに越知山開運講中が奉納した石灯籠一对（基礎・竿・中台までが遺存）が所在する。肝煎三名は駒屋羽江、竹内布珀、鷺田省齋と「号」を刻んでいる。

（五）別山堂の山岳信仰碑

現別山堂付近に「明治元年（一八六八）三年」「開運講中建立」「開運講中再建」と「駒屋（羽江）」銘が刻まれた山岳信仰の石碑が九基（白山妙理大権現」「日野山大権現」「文殊師利菩薩」「大峯八大金剛童子」「日吉大明神」など）遺存する。

越知山のほかに、泰澄が開闢したとされる白山、日野山、文殊山、蔵王山（吉野ヶ岳）を加えて「越前五山」と称する山岳信仰も崇敬されていたようである。「山口家譜」の記述「安政二年七月二十二



写真8 山岳信仰碑

日 小左衛門 日野山  
へ参詣ス」（小左衛門  
はのち開運講員）から  
その一面を窺い知るこ  
とができよう。  
（六）開運講最後の奉  
納品となった「手水鉢」  
前述の手水鉢。明治



写真9 手水鉢

三年（二八七〇）に宿堂の一王子社まで運ばれ、講錢不足になり越知山頂まで運ぶことができなかつた手水鉢で、現在は大谷寺の山門前に所在する。正面に「越知山大谷寺開運講」と彫る。

### あとがき

別当大谷寺の法灯消滅後、大谷寺再興の要望が強く、明治八年（二八七五）、比叡山延暦寺から僧道款が派遣され、明治十二年（二八七九）、天台宗延暦寺末越知山大谷寺が再興された。再興後間もなく、無縁無檀の大谷寺を永続させるための資金を集めるため、越知山開運講復興を期して、大谷寺と大谷寺村の信徒総代四人佐々木與三右衛門、佐々木勘右衛門、山田多左衛門、佐々木岩左衛門が中心になって「越知山開運講勧誘記」と「定則（趣法）」を認め、再来講員の募集活動を開始した。この講は以前のような大規模な団体ではなかったが、大正年間中頃まで継続していたようである。

駒屋善右衛門らがのこした「越知山開運講のしくみ」は生かされ、一部内容を変えて継承されたのである。

最後に、越知山開運講を運営した肝煎三人は文化人としての活動も行っており、それぞれが詠んだ越知山の句・歌を記しておこう。

駒屋善右衛門羽江 「藪茂る 連理の枝や 恋の山」

竹内五兵衛布珀 「道問えば 雲ゆひされや 葉堀」

鷺田次郎兵衛省齋 「幾代とも 知らず白斑の もろ烏

もろともにこそ 神につかふれ」

以上

〔謝辞〕本書に掲載した史料（「大谷寺文書」）は、昨年一部に初公開<sup>⑤</sup>されたが、内容は越知山開運講の研究に留まらず、幕末の越前の政治・社会・経済活動と絡めて見ることを必要とする資料である。越知山開運講の史料が少ない中、これらは研究者にとつて貴重な史料である。公開頂いた大谷寺住職西山良忍氏の御厚意に感謝したい。

#### 註

〔1〕「山口家譜」（山口小左衛門家の史料。『福井市史資料編7』所収）。藩の殖産興業策のため、領内の産物を集荷販売する「産物会所」を横井小楠の指導のもと長谷部甚平や三岡八郎（後の由利公正）が実践、三国、福井などの有力商人が元締めとして加わった。万延元年十一月の開設時は内田惣右衛門宅（三国）に置き、山口小左衛門、竹内五兵衛、内藤理兵衛、木綿屋与左衛門の四人が元締め任命された。

〔2〕『平成一八年秋季特別展 福井藩と豪商』福井市立郷土博物館、二〇〇六年。本書に福井藩とかかわった豪商を取り上げ、特に駒屋家・金屋家（福井）、内田家・三国（森）家（三国）を挙げて藩との関わりを記している。

〔3〕「太田陣屋」安政六年、福井藩が幕府の命により開港後の横浜を警護するため、横浜の大田村に建てた陣屋。藩は普請掛として岡倉寛右衛門（岡倉天心の父）を、警護役として三岡、小木を派遣した。

〔4〕三井紀生「越知山開運講について」（『越前町織田文化歴史館研究紀要』第二集、越前町教育委員会、二〇一七年）本稿で開運講中及び肝煎による石造物などの奉納物十九件を紹介した。

〔5〕三井紀生『越知山開運講資料』（越知山大谷寺、二〇一七年）。

〔6〕駒屋善右衛門が、安政六年（一八五七）に大谷寺へ奉納した木版の「越前國越知山之圖」に、後日慶応二年（一八六六）三人が越知山を詠んで入駒にしてのこしている。

#### 参考文献

- 1 『朝日町誌 通史編』（朝日町、二〇〇三年）
- 2 『朝日町誌 資料編 越知山関係他』（朝日町、一九九八年）
- 3 本川幹男「幕末福井藩の殖産興業策と財政について」（『若郷土研究』三〇三号、二〇一七年）
- 4 三井紀生『越知山大権現の神仏と石造物』越前町教育委員会、二〇一七年